

日本声楽発声学会

学会通信 37号 2017年(平成29年)7月発行

会員の皆さま

平成29年の盛夏を迎えます季節がやってまいりました。お健やかにご活躍のこととお喜び申し上げます。

学会通信第37号をお届けいたします。

私が、本学会の会長を仰せつかりましてから、5月27日の例会・総会をもちまして早や丸一年が経ちました。この一年を思い返せば、恒例として行われる学会主催の企画運営に対応しながら、かたや本発声学会創立より50年余りを経過した学会のたまりに溜まった資料の整理や、世相の変化に対応すべく企画や運営の軌道修正にその月日を費やしたような気がいたします。前者の多数の資料は、年々歳々移り変わる世相の中で学会が活動してきた証しであり、それらはあちこちで保管され、大切にお預りくださいました事務運営に関わってこられました方々の好意の他ありません。やらねばならない時かと思ひ、それぞれお忙しい中無理をお願いし、一処に収集いたしました。

集めてみますと、学会誌やその他例会時に使用し、記録してまいりました録音録画や機材等、すべてその時その時に、人の思いや活動があったことが思い返され、50余年の年月に非常な重みを感じます。例会も回を重ねて今回で106回目、学会誌は53巻を数え、平成19年に発行された40年史を加えますと54冊を発刊してまいりました。40年史を発刊するにあたって交わされた言葉は「過去の事実が正しく保管されて次の世代に申し送ることの責任は大きい。それまでの記録の紛失があってはならない」が合言葉でありました。

その54巻の中には、いろいろな研究者の知恵と努力と思ひ入れが詰まっていることを実感し、人の営みの健気さに感動さえ覚えます。

人と人との交わりや信頼、そして約束事は言葉によってまた藝術によって生まれます。その伝達方法のための、本学会では「声を創り出す」その基本の作業の追求のために、揺るがすことのできない医学的見地の科学者と実践で実証する芸術家の研究に、お互いその英知の提供をしてまいりました。集められた過去の実績が詰まる歩みの証しは、何ものにも替えることの出来ない資料の

数々で、偉大にさえ見え、決して無駄ではなかった足跡が感じ取れます。

人々の多くの体験により次への発想を生み、また体験しながら前進する人間の営みに感慨深く、今後も多くの英知とたゆみない実践努力をもって、研究がますます深まりますよう、企画運営に精進したく存じます。また皆さまの積極的な研究の提供を心よりお待ちしております。

2017年6月25日 永井和子

1. 学会誌『声楽発声研究』第8号の誤植に関するお詫びと訂正

2017年3月発行の『声楽発声研究』第8号におきまして、出版社の不注意による誤植が発生いたしました。出版に当たった時空出版社から以下の文章および正誤表を受け取りましたので、掲載いたします。

『声楽発声研究』第8号において下記の誤りがありましたので、訂正させていただきます。これは校正漏れにより生じたもので、関係各位にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げます。 **時空出版(株)**

誤植がありました件に関して、事務局、編集委員会からも深くお詫び申し上げます。 **事務局長 川上 勝功 編集委員長 鈴木慎一郎**

正誤表		
	〈誤〉	〈正〉
目次, P27 タイトル	発声時における咽頭	発声時における喉頭
目次, P68 左 プロフィール	新美	新実
P32 右 下から4行目	2017年	2016年
P59 右 下から3行目	声帯が永く	声帯が長く
P71 左 下から14行目	tempo	tempo
P76 左 下から18行目	私立	市立
P76 左 下から16行目	化劇場	歌劇場
P76 右 下から16~17行目	こし	コシ
P77 右 学会記録Ⅱ夏季研修会	新美	新実
P80 諸規程 第6条会員	その資格国籍の	その資格は国籍の
P86 定期演奏会規程1目的	行うものとする	行うものとする
P87, 奥付	永倉	永原

2. 2017年5月28日開催の第105回例会における「特別講演」および「現役声楽家の演奏」への感想

① 小林武夫先生のご講演のお手伝いをさせて頂いて 理事 西浦美佐子

帝京大学病理の先生が作ってくださった成人と子供の喉頭と気管の標本を小林先生が会場に持ってきてくださいました。標本を作りますときは、普通はホ

ルマリンを使いますから標本が固くなります。標本は特別な方法で作られてあり、表面を軽く手で触ることができました。色はやや白っぽいですが、生々しい感じがしますほど、その方が生きておられたときとほとんど同じやわらかさでした。私もこのような喉頭と気管の標本を初めて見せていただきました。

後半は竹田先生と西浦で軟性ファイバースコープを使いまして会場で希望者の声帯（喉頭）や声道、鼻腔の観察をしました。声帯を調節する筋肉の使い方の違いによる声質の違い、チェンジがはっきりしている人の声帯の様子、声区と声帯の関係はどうなっているのか、無気音と有気音、喉頭の位置関係での音色の違い、喉頭蓋、喉頭室、仮声帯の状態の違いによる音質の差などを、声楽家の方々が発声、歌われましたので皆様にご覧いただくことができました。当日のストロボファイバースコープの器械は、第一医科 (First) と STORZ の方々のご協力により会場にセッティングされました。

② 現役声楽家 藤田卓也氏をお招きして 理事 虫明眞砂子

現在、藤原歌劇団の主役テノールの一人としてご活躍の藤田卓也氏は、今春に「カルメン」のドン・ホセ役、7月に「ノルマ」のポリオーネ役で出演されるなど、飛ぶ鳥を落とす勢いの新進気鋭のテノールです。藤田さんは、山口県のご出身ですが、全国各地でご活躍なさる現在も、山口のご自宅から各地へ出向いていらっしゃるとお聞きしています。数年前に、山口に素晴らしいテノールがいるとの噂が耳に入り、その後、私は、「トスカ」のカヴァラドッシ役やアンドレア・シェニエ役をお聴きする機会があり、声の豊かさや役作りの素晴らしさに感激し、この若きテノールを学会でご紹介することにいたしました。今回の声楽発声学会でのプログラミングは、日本歌曲からカンツォーネ、イタリア歌曲、オペラアリアとバラエティに富んでおり、現在の藤田さんの声の魅力が遺憾なく発揮されたプログラムだったのではないのでしょうか。

日本歌曲の「あんこまパン」（伊藤康英）では、ユニークな表現で会場の聴衆の笑いを誘い、カンツォーネとロッシーニの「踊り」では、声の魅力とテクニックを発揮、続いて、オペラ「アンドレア・シェニエ」のアリア2曲、そして最後は、「トゥーランドット」のカラフのアリアとヴェリズモオペラの重い役どころを情熱的に、見事に歌っていただきました。

留学されたウィーンでは、「ジュディッタ」「ほほえみの国」「メリー・ウィドー」「ウェルテル」「コジ・ファン・トゥッテ」「リゴレット」等に出演。また、スロヴァキアのコシツェ国立歌劇場において、「椿姫」アルフレード役、バンスカー・ピストリツァ国立歌劇場において、「ラ・ボエーム」ロドルフォ役として出演。「ラ・ボエーム」の公演初日には満場総立ちとなり幾度のカーテンコール

後も拍手が鳴り止まなかったそうです。2006年帰国以降は、「夕鶴」「リアの物語」「コジ・ファン・トゥッテ」「魔笛」「セビリヤの理髪師」「愛の妙薬」「ランメルモールのルチア」「ラ・ファヴォリータ」「ドン・パスクワーレ」「清教徒」「ノルマ」「カルメン」「道化師」「椿姫」「リゴレット」「オテッロ」「アイーダ」「仮面舞踏会」「妖精ヴィッリ」「蝶々夫人」「マノン・レスコー」「ラ・ボエーム」「外套」「トゥーランドット」「トスカ」「カヴァレリア・ルスティカーナ」「カルメル会修道女の対話」その他、オペラの主要な役を演じられ、枚挙に暇がありません。また、2016年ベルガモの聖ジョヴァンニ・ボスコ劇場にて歌劇「清教徒」アルトゥーロ役でイタリアでのオペラデビューをされています。

藤田卓也氏の今後ますますのご活躍を期待しております。

参考：藤田卓也 HP：<http://fdinc.jp/fujitatakuya.html>

3. 2017年8月夏季研修会のプログラム

日時 2017年8月21日(月) 13:00 ~ 17:20

22日(火) 10:00 ~ 15:30

会場 日本福音ルーテル東京教会(新大久保駅下車)

住所：東京都新宿区大久保1-14-14(会場への電話はご遠慮ください)

プログラム

第1日：8月21日(月) 13:00~17:20 2階礼拝堂

総合司会 佐々木正利(両日)

A 講座：13:00~15:00

(司会：川上勝功)

ニコラ・ロッシ・ジオルダーノ氏(テノール)による公開レッスン

講演テーマ：発声を中心とした、イタリア歌手の立場からのレッスン

講師：ニコラ・ロッシ・ジオルダーノ氏(世界各地でオペラ歌手として活躍)

通訳：栗原利佳(フェリス女学院大学音楽学部声楽科卒業、同大学院修了)

ピアノ：早川揺理(フェリス女学院大学音楽学部器楽科卒業、

東邦音楽大学総合芸術研究所ピアノ伴奏法コース修了)

受講生：大垣ひで美(Sop)・釵持瑞穂(Sop)・田中雅史(Ten)

B 講座：15:20~17:20

(司会：永井和子)

現代日本の作曲家シリーズ講座Ⅳ

講演テーマ：「日本語の歌」— 歌曲・オペラの創作を語る

香月修氏の作品を通して、作曲家の意図とされるところや、日本語歌唱に対する演奏家への要望等をお話しいたします。

講 師：香月 修氏（元桐朋学園大学音楽学部教授）

演奏曲目：歌曲-〈鶯（いし）のうへ〉〈月夜（げつや）の森〉、
オペラ-《夜叉ヶ池》より〈百合のアリア〉〈子守歌〉
（原作：泉鏡花 台本：香月修／岩田達宗）

演奏者：松島理紗（ソプラノ）、西原瑠一（ピアノ）

第2日：8月22日（火）10：00～15：30

C 講座：10：00～12：00 @会議室 （司会：豊田喜代美）

講演テーマ：身体運動科学

「感覚し、運動する身体：生体情報から読み解く身体感覚」

講 師：工藤和俊氏（東京大学大学院情報学環准教授・本学会員）

D 講座：（開場）12:30（開演）13:00～15:30@礼拝堂 入場料：2,000円

「歌の集い」演奏会（司会：豊田喜代美）

第1部 本学会員による演奏 *()内はピアニスト

川上勝功（早川揺理） — シューベルト〈楽に寄す〉 他
小林寿和子（黒田圭子） — ドビュッシー《忘れられたアリエッタ》全曲
高橋昌子（松下智子） — 武満徹〈小さな空〉他
喜屋武いつみ（林翔子） — ヘンデル《メサイア》より“アリア”
女声アンサンブル“グリュツィーネ” 指揮：藤田明（山田裕子）
— モーツァルト〈アヴェ ヴェルム コルプス〉他

第2部 レクチャーと演奏

山田 実（テノール）本学会相談役、ピアノ 入川めぐみ（会員）

講演内容： 1) 邦訳歌唱の功罪
2) 日本語歌唱の問題点
3) Tenors are not to be born but to made.

4. 2017年11月106回例会案内紹介

A 研究発表

1) 発表者：重田敦子理事

題目：「マリアの呼吸 Atem-Tonus-Tonにおける歌唱者の体験的実践から見た一考察」

要旨：フィレンツェにあるロレンツォ・ディ・メディチ図書館に保存されている“世俗音楽”、“声の音楽”、“楽器製作とその音楽”と題された細密画（1,300年ごろ）に付記する文のうち“声の音楽”の部分に、つぎのように記されている。「人類の音楽（*la musica humana*）は、魂とその魂が表出するものとして理解される声の音楽（*La musica vocale*）である。声の音楽は、“身体の構成要素”とその体が併せもつ“精神心理的な要素”を調和、統一させる力を持っている。（注1）」この一文は、記された時代の音楽的背景を伝えるとともに、“人が歌う”という行為が、歴史的にも、現在もその本質に変わりがないことをも気づかせてくれる。

筆者は、声の音楽の柱は、呼吸であると考えている。人とその声の関係は自明の理として存在しているが、身体に息が生まれ、その息に声が乗り、その声は息とともに身体内に共振を伝え、外へと表出されていくとき、人と声の関係は、自明の理を超えて、唯一無二の関係になることこそが歌唱の本質であると考えている。

“マリアの呼吸法”として知られる、*Atem-Tonus-Ton*（息一導一響）は、ドイツ人であるマリア・ヘラー（*Maria Höller-Zangen Feind*）が主張する、呼吸と体に関する心理療法プログラムである。話者、アーティスト、医師、治療者、教育者における身体・声・動作に関する統合的なテーマについて対象としている。

Maria Höller-Zangen Feind は、人間が大地との接着によってもたらされる、重力への拮抗状態をバランスよく保つ力（作用反作用の原理による自然発生的に生ずる力）、生命の原動力としての呼吸の働き（*contemplative breath*）と体位の保持および変換するための筋肉の動き、骨格系の体壁振動を含めた、共鳴腔調節のための動きを総括したものによって、呼吸と発声をつなげることが必要だという。そして、こうしたトレーニングを重ねることで、精神心理的な内面と、生理学的な外面の機能との調和を作り、それが個人の人格形成になり、さらに声という表現手段となって表出されるべきであると主張している。

この *A.T.T.*における療法トレーニングコースは、医学博士米山文明が医学的（解剖医学的、精神医学的）観点、物理学的観点から研究し、その具体的内容と展開方法について *Maria Höller-Zangen Feind* と共同開発したプログラムとして展開されている。

筆者はこの主張に深く注目し、「米山文明呼吸と発声研究所」が展開している *Atem-Tonus-Ton* のワークスタディ（指導者養成コース）に参画し、実践を重ねていく過程において、歌唱者として体感・体得した自らの理解と考察を報告する。

(注1) Dizionario dell'Arte [La Musica] (Mondadori Electa, Milano)

【参考文献】DVD 「息から声へ マリアの呼吸法」(音楽之友社) 解説書

2) 発表者：河合孝夫理事、田村邦光氏

題目：『声楽発声の母音のフォルマントと会話のフォルマントの比較』

要旨：声楽家が歌唱中にする発音は、美しい歌声の発音であり、普通の人が会話中にする発音とは明らかに違って聞こえる。本研究では、両者の違いがどこから来るのか、音声学の母音フォルマントと声楽家の歌唱中の母音フォルマントを音響分析した結果を比較考察し、その原因が声楽発声の基音上のフォルマント構成にあることを突き止めた。

発声における音の共鳴特性(周波数～倍音～音圧)は、声道(共鳴腔)のフィルター特性(伝達関数)に支配され、母音の違いは、声道のフィルター特性によりそれぞれの母音の第1フォルマントと第2フォルマントの違いにより区別される。そして、それらのフォルマントは、発声した音の高さに関わらずほぼ同じ周波数帯域に現れる。

そこで、パパロッチェ、ドミンゴ、ディスカウ、カラス、グルベローヴァなど複数の一流声楽家の声を、男声は低音 E3、中音 D4、高音 F4 の高さでア、イ、ウ、エ、オの5母音の無伴奏歌唱を選んで録音し音響分析したデータと、会話の母音フォルマントと比較しその違いを考察した。

同様に女声は、中音 C5、高音 F5#の高さでア、イ、ウ、エ、オの5母音の無伴奏歌唱を選んで録音し音響分析したデータと、会話のフォルマントとを比較しその違いを考察した。

その結果、会話のフォルマントには、ピッチを決定する基音がなく一定のフォルマント帯域で母音の違いを示すフォルマントがあるのに対して、声楽家の声は歌われたピッチの基音上の倍音が母音の違いを示すフォルマントになっていることが分かった。そして、両者にはフォルマント帯域に多少の違いはあるものの明らかな相関関係があった。声楽家はこの相関関係により歌唱の中で母音の違いを聞かせ、同時に声楽家の母音は基音上の倍音構成によって声楽的な声にしていると考えられる。

これらの違いから、会話発音が言葉の伝達を目的にしているのに対して、声楽発声の発音は音楽を優先した発音になっていると言える。

B. 特別講演

講師：中村敬一氏

題目：歌うことと演じること どこで、その接点を見いだすか？

舞台上で求められる演技と発声に必要なフォームとのバランスをどうとるのか？

概要：オペラの舞台でも、色々な演出、演技の求められる時代となってきた。それだけ、歌い手に色々な要求に応えるだけのポテンシャルとテクニックが求められると云うことでもある。しかし、いまだにオペラの現場ではオペラでの演技の本質や在り方が関わる出演者とスタッフの間で了解されているとはいいがたいし、どこの教育現場でも、演劇の演出家が演技指導をしたり、あるいは芝居の役者が演技の指導をするが、そのことと発声や歌うこととの共存やバランスが明確に理解されているとはいえない現実がある。演出家の求めるリアリティーとオペラの持つ様式が、未整理のまま舞台に繰り広げられている現実を目の当たりにすることもしばしばだ。

今回の特別講義では、実際の若い歌い手の演唱に演技を付ける作業をしながら、歌唱表現と演出の表現がどのように作用しあい、どのように高めあえるかを考証し、視覚的な表現と聴覚的な表現の関係について、また、声楽家がどのように演技と歌唱を両立させて舞台に立つべきかについて言及する。

プロフィール

中村敬一氏

武蔵野音楽大学同大学院で声楽を専攻、のち舞台監督集団「ザ・スタッフ」に所属してオペラスタッフとして活躍。以後、鈴木敬介、栗山昌良、三谷礼二、西澤敬一各氏のもと演出の研鑽を積む。1989年より、文化庁派遣在外研修員として、ウィーン国立歌劇場にて、オペラ演出を研修。帰国後、リメイク版《フィガロの結婚》、で、高い評価を得、二期会公演《三部作》、東京室内歌劇場公演《ヒロシマのオルフェ》、日生劇場公演《笠地蔵・北風と太陽》で、演出力が絶賛され、1995年、第23回ジローオペラ、新人賞を受賞。2000年3月には新国立劇場デビューとなった《沈黙》が、高く評価され、2001年ザ・カレッジ・オペラハウス公演《ヒロシマのオルフェ》では、大阪舞台芸術奨励賞を受賞。オペラの台本も手がけ、松井和彦作曲《笠地蔵》、《走れメロス》、新倉健作曲《ボラーノの広場》、《窓（ウィンドウズ）》などがある。国立音楽大学客員教授、大阪音楽大学客員教授、洗足学園音楽大学客員教授、大阪教育大学講師、沖縄県立芸術大学講師。

C. 現役声楽家の演奏とお話

講師：今尾 滋氏（テノール）

題目：「キャリア開始後の声種変更に対する演奏家の立場からの一提言」

ピアノ：古藤田みゆき

演奏曲目（抄）：

R. ワーグナー

《ヴァルキューレ》より〈父はわたくしに一振りの剣を約束した〉

《ヴェーゼンドンクの5つの歌》より〈苦悩〉

他

プロフィール

今尾 滋氏 (テノール)

早稲田大学法学部卒業後東京藝術大学大学院博士課程を修了。博士号取得。ブダペスト国際声楽コンクール2位。日本とヴェローナでR・ブルゾン氏のアンダースタディとして研鑽をつむ。文化庁在外研修員として渡伊。バリトンとして活動した後、《ヴァルキューレ》のジークムントでテノールとして再デビュー。その後《神々の黄昏》のジークフリート、《フィデリオ》のフロレスタンなどの諸役を歌う。ルネ・コロ氏のマスタークラスに参加。ヴァーグナー、R・シュトラウスを歌い、往年の名ヘルデンテノールから絶賛された。本年5月には新国立劇場公演《ジークフリート》においてS・グールド氏のカヴァーを務める傍ら、カヴァーキャストによるハイライトコンサートでジークフリートを歌い絶賛された。福島大学准教授。東京藝術大学及び国立音楽大学非常勤講師。日本声楽家協会アカデミー会員。サントリーホール・オペラ・アカデミー、コーチング・ファカルティ。二期会会員。

古藤田みゆき (ピアノ)

日本大学芸術学部音楽学科ピアノ科卒業。東京二期会、藤原歌劇団などで音楽スタッフとして経験を積む。1993年から2010年までサントリーホールホール・オペラ®のチーフ音楽スタッフを務め、世界的な指揮者や歌手から厚い信頼を得た。国内外のコンクール、音楽祭、マスタークラスに招かれるほか、オーケストラ・パートをピアノ1台で演奏するオペラ全曲公演でも活躍。サントリーホール オペラ・アカデミー コーチング・ファカルティ。

5. 第106回例会における「研究発表」募集

2017年11月26日(日)の106回例会にて、会員の皆さまの口頭発表による応募のお誘いです。

本学会は、理論、演奏、教育の3研究を柱に、年に2回(5月・11月)の例会で、1例会3研究の発表を行っておりますが、11月26日(日)の106回例会に、発表予定の一人に事情により辞退者が出ました。諸規程の「研究発表規程」第2条 口頭発表(エ)の規程からは例外となりますが、奮ってのご応募をお待ちいたします。

ご応募は、7月末日を締め切りに、テーマと概要を、事務局にご提出お願いいたします。

決定は、即理事会で検討しご通知いたします。 執行部事業企画 永井和子

6. 会員よりのお知らせ（山田実相談役より）

ムジカ・サクレ・トウキョウ公演 マルチン・ルター宗教改革500年記念 キリスト教音楽の歴史をたどって

2017年10月7日(土) 14:00～ @日本福音ルーテル東京教会 ¥1,000

(曲目) グレゴリオ聖歌

Heinrich Isaac (c1450-1517) 〈Innsbruck, ich muss dich lassen.〉

Giovanni Pierluigi da Palestrina (c1525-1594) 《Missa brevis.》

Johann Sebastian Bach(1685-1750)

〈Ein feste Burg ist unser Gott.〉 (BWV 80)

Martin Luther 1、2、5、8節 ～ 三浦義和訳

Michael Frank 2、3、4、7節 ～ 山田実訳 他

(演奏者) 指揮 山田 実

S 田中始子、A 森井佳子、T 三宅 淳、B 石川岩夫

合唱 ムジカ・サクレ・トウキョウ、

管弦楽 CIEL東京室内楽団

オルガン 高橋のぞみ

7. 音楽学の窓から（第1回）

理事 永原恵三

本コーナーでは、音楽学の近年の研究から、声の音楽に関する論文などを簡単にご紹介いたします。第1回は、1990年に大阪で開催された国際音楽学会シンポジウムでの基調講演から、中国の羅傳開氏による『Double cultural contact: diffusion and reformation of Japanese school songs in China 二重の文化接触：中国における日本の学校唱歌の伝播と変容』です。

日本では明治初期に伊澤修二らによって学校教育に唱歌が導入され、それに伴って西洋音楽が日本に受容されました。そして、20世紀初頭の中国においてその学校唱歌が導入されて、学堂楽歌となりました。たとえば、日本では「蝶々」として知られている唱歌は、中国では沈心工による中国語の詞がつけられ「賽船」（ボートレース）となりました。このようにして、中国は日本を通じて西洋音楽を受容したことになります。こうした伝播のあり方を、羅傳開氏は「二重の文化接触」として捉え、中国のみならず同様に朝鮮や台湾などの東アジアにおける西洋音楽受容の構造を示しています。

この論文からわかることは、中国などの日本の外側から見ると、日本の西洋音楽受容が必ずしも受け身的な側面だけではなく、さらにそれを伝播するという発信側にもあったということです。このことは学校唱歌だけでなく、西洋の

声楽もまた同様であったことをも示唆しています。

【文献情報】

LUO, Chuankai (羅傳開)

1991 “Double cultural contact: diffusion and reformation of Japanese school songs in China” in *Tradition and its future in music*, Proceedings of the 4th Symposium of the International Musicological Society, TOKUMARU, Yoshihiko et alii (eds.) Tokyo & Osaka: Mita Press, 11-14.

8. 事務局だより

前回4月に学会通信36号をお届けしてから、まだわずか3ヶ月しか経っておりませんので、今回は特別に皆様にご報告させていただくことはございません。ひとまず5月の例会及び総会が、80名近くの会員の出席を得て無事成功裡に終えることが出来ましたことをご報告いたします。

午前中の①は加藤晴子氏、村田睦美氏の共同研究発表「小学校や小学校教員を対象とした合唱指導の試み -発声と歌唱表現の接点を求めて-」。②は、西浦美佐子理事による「音声障害をきたした歌手の自覚的評価～Singing Voice Handicap Indexの検討～」の研究発表。③は、鈴木慎一郎理事による「今日の学校教育におけるオペラ学習 -教科書分析を通して-」の研究発表。と、持ち時間はお一人25分、プラス5分の質疑応答と大変短い発表時間でありましたが、それぞれが大変興味深く、よく研究され、これ又、5分と短時間の質疑応答でありましたが、参会者から熱心な質問が寄せられました。

続いて臨時会員の方々には席を外していただき、総会が開催されました。恒例の報告が行われ、議事は全て会員の皆様のご理解とご協力を得て無事に終えることが出来ました。最後に前幹事をなさっておられた会員の方から、個人に関する質問が寄せられましたが、未解決の部分が多いため、問題解決まで、しばらく時間がかかることをお互いに確認して終わりました。

午後は、特別講師に学会相談役の小林武夫氏をお迎えして、同じく当学会理事の竹田数章氏と西浦美佐子氏にお手伝いいただき「声はどのようにして作られるか」～発声の解剖と生理～のタイトルで講演していただきました。当日は、小林先生は体調を崩しておられたにも拘らず、わざわざ鎌倉のご自宅からおいでいただき、喉頭鏡、喉頭ファイバースコープ等を持参され、大きなスクリーンに会員の中から希望された方の声帯を写して下さり、大変分かりやすい説明をしていただきました。計画をした私達の予想を上回る反響で、大変好評でありました。

最後の現役声楽家の演奏とお話には、現在藤原歌劇団に所属し、忙しく活躍

しておられる藤田卓也氏をお迎えしました。当日は、生憎と芸大が5芸祭の基幹校となっております、第2ホールも第6ホールも使用不可となっていたため、それまでと同じ109の大教室での演奏となってしまいました。本来ならば大きなホールで聴かせていただきたかったのですが、まさに目の前で、輝かしく張りのある若々しいテノールの演奏を聴くことが出来て、参会者は大喜びでありました。本当に素晴らしく立派な演奏であったことを記しておきます。これら午後からの二つの講演と演奏につきましては、西浦美佐子理事と虫明眞砂子理事が報告書を書いておられますのでそちらをどうぞお読みください。

最後になりますが、小林先生、藤田さん、有難うございました。あらためてここに心からの感謝と御礼を申し上げます。

事務局長 川上勝功

日本声楽発声学会事務局（担当：安原道子）

〒215-0003 神奈川県川崎市麻生区高石4-11-14-409（安原）

E-Mail : info@jars-voice.org

Tel/Fax : 044-577-2037

日本声楽発声学会Webサイト <http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920 加入者名：日本声楽発声学会

9. 編集後記

学会通信第37号をお届けいたします。8月の夏季研修会、11月の第106回例会のご案内を中心に、会員によるコンサートなどの情報、そして、今回から「音楽学の窓から」のシリーズを始めます。今後も少しずつですが、内容が充実できるよう努めてまいります。

広報・情報委員長 永原恵三

日本声楽発声学会

学会通信 第37号

2017年（平成29年）7月25日発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：永原恵三

印刷所：よしみ工産株式会社東京事務所

〒113-0033 東京都文京区本郷3-26-1 本郷宮田ビル3F